

住まいの工夫

愛知県名古屋市立大高中学校

一年 男 榊原 大和

僕は、『考えよう！わたしたちの快適な住まい』を読んで、日本の伝統的な住まいには、快適に生活するための住まいの工夫がたくさん詰まっているのだと、今回改めて知ることができました。

僕の祖父の家は、富山の田舎にあります。富山では一般的な、全黒瓦で全体的に外観はすっきりとしています。中に入ると、縁側に並んで座敷と仏間の和室があり、奥には生活スペースが広がっています。僕は今まで、この富山の家のつくりの意味がよく解っていませんでした。そして座敷にある松、竹、梅が立体的に彫刻されている欄間は、僕にとってはただの飾りだと思っていました。

でもこの副読本を読んだ時に、「伝統的な住まいには、地域の気候風土によって育まれた暮らしの知恵や豊かさがあって、それぞれの環境の中で、住まいの工夫がされていることが書かれていました。

そこで、欄間にも実は意味があるのではないかと思い、調べてみることにしました。欄間は、平安時代に原型がみられ、平等院鳳凰堂にも採用されていたこと、飾りだけではなく、採光や通風がわずかな隙間から差し込むことで、人の気持ちや体に心地よさを与えてくれることなどが分かってきました。これはまさしく、富山の気候の特徴を考えた工夫の一つだったのです。

富山は、二日に一回は雨が降るので湿気が多く、陽が入る日が少ないのです。そして冬には、重たい雪を屋根で支えます。このことから、欄間も黒瓦も住まいを守る役割をしっかりと、担ってくれていたのです。

昔から人は、住まいの工夫と知恵を取り入れながら、快適さとやすらぎを求めているのだと感じました。それをこれから、僕たちがどのように引き継ぎ、活かしていくのか、とても大切だと思います。人にとって、心も体も満足できる居心地のいい空間が、ずっと長く続いていくことを願っています。